

Ⅶ 広島プロジェクトの3カ年の研究から学ぶもの

－異文化理解教育のカリキュラム開発の視点と方法－

1. 3カ年の研究の整理

広島大学国際理解教育研究会では、1993年度～1995年度の3カ年計画で「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」を行ってきた。

本研究の目的は、中国地方5県の小・中・高等学校の社会科・英語科の教師が、アメリカ合衆国での現地調査やワークショップを通して、現地のパートナーの協力のもとにアメリカ合衆国の社会と文化に関する教材研究を行い、日米の社会と文化を相互に理解し合うための教材を開発することとともに、日米の教師間のネットワークをつくることをねらいとしている。またまた、そのことを通して、国際理解教育の中心をなす異文化理解教育のためのカリキュラム開発の視点と方法を発見することをねらいとしている。

このような目的を実現するために行った広島プロジェクトの3カ年の研究の内容を、研究組織、調査研究テーマ、開発教材について整理すると、以下の通りである。

(1) 広島プロジェクトの研究組織一覧

	第1年次（1993年）	第2年次（1994年）	第3年次（1995年）
代表	溝上 泰（広島大学学校教育学部教授）	溝上 泰（広島大学学校教育学部教授）	溝上 泰（3月31日まで） （鳴門教育大学教授） 小篠 敏明（4月1日より） （広島大学学校教育学部教授）
研究分担者	小篠 敏明（広島大学学校教育学部教授） 中山 修一（広島大学教育学部教授） 小原 友行（広島大学学校教育学部助教授）	小篠 敏明（広島大学学校教育学部教授） 中山 修一（広島大学教育学部教授） 小原 友行（広島大学学校教育学部助教授） 深沢 清治（広島大学学校教育学部助教授）	中山 修一（広島大学大学院国際協力研究科教授） 小原 友行（広島大学学校教育学部助教授） 深沢 清治（広島大学学校教育学部助教授）
A	◎富村 誠 広島大学附属東雲小学校 ○庄野 英憲 広島市立本川小学校 ●田尻 悟郎 島根町立野波中学校	◎生田 一人 東広島市立東西条小学校 ○津森 毅 東広島市立高美が丘小 ●小田原順蔵 広島市立瀬野川中学校	◎武智 正紀 広島市立千田小学校 ○中森 英雄 東広島市立西条中学校 ●原 みよ子 広島市立城山中学校

	<p>ジョン・スウォープ イーストカロライナ大学 レベッカ・ブレント イーストカロライナ大学 シンシア・ロジャース ミネソタ州指導主事</p>	<p>グレゴリー・ヘスティング イーストカロライナ大学 ポール・シャーパン ミネソタ州日米協会</p>	<p>ロジャー・ワンゲン ミネソタ州教育省 H. C. ハジンス イーストカロライナ大学 ジョン・スウォープ イーストカロライナ大学</p>
B	<p>◎松田 和彦 広島市立清和中学校 ○殿垣内 実 広島市立落合中学校 ●白石真理子 岩国市立藤河中学校</p>	<p>◎朝倉 淳 広島大学附属三原小学校 ○鈴木 理生 松江市立城北小学校 ●高橋 和美 松江市立第二中学校</p>	<p>◎吉浦 公子 広島大学附属東雲小学校 ○洗川 玲子 三隅町立岡見小学校 ●永田 祐治 大和村立大和中学校</p>
	<p>ドナルド・スペンス イーストカロライナ大学 グレゴリー・ヘスティング イーストカロライナ大学 クリスティン・ソングスト ミネソタ州小学校教諭</p>	<p>ヘンリー・ピール イーストカロライナ大学 ボブ・エリクソン ミネソタ州教育省</p>	<p>ケイティ・マクドナルド ミネソタ州高等学校教諭 グレゴリー・ヘスティング イーストカロライナ大学</p>
C	<p>◎小嶋祐何郎 広島大学附属東雲中学校 ○今福 茂樹 岡山大学附属中学校 ●東岡 理恵 広島市立亀山中学校</p>	<p>◎八松 泰子 広島市立井口台中学校 ○鍵本 芳明 倉敷市立南中学校 ●梶原 敏 岡山大学附属中学校</p>	<p>◎上之園 強 広島大学附属東雲小学校 ○平田 潤 江津市立有福温泉小学校 ●山崎 葉子 広島大学附属三原中学校</p>
	<p>H. C. ハジンス イーストカロライナ大学 エドウィン・ベル イーストカロライナ大学 キティ・エンロー ミネソタ州小学校教諭</p>	<p>ドナルド・スペンス イーストカロライナ大学 デール・エリクソン ミネソタ州高等学校教諭</p>	<p>デール・エリクソン ミネソタ州高等学校教諭 ドナルド・スペンス イーストカロライナ大学 ヘレン・パーク イーストカロライナ大学</p>
D	<p>◎田中 泉 広島大学附属中・高校 ○根平雄一郎 米子市立尚徳中学校 ●鷹家 秀史</p>	<p>◎梶 典之 広島市立安佐中学校 ○石丸 義臣 防府市立富海中学校 ●野村 卓也</p>	<p>◎森 信吉 広島市立宇品中学校 ○齋藤 教津 豊田町立豊田西中学校 ●栗林 正和</p>

	岡山県立朝日高校	山口県立宇部高校	山口県立西京高校
	ベティ・リビー イーストカロライナ大学 チャールズ・コーブル イーストカロライナ大学 ウォルター・エンロー ミネソタ大学	エドウィン・ベル イーストカロライナ大学 クリスティン・ソンガスト ミネソタ州小学校教諭	クリスティン・ソンガスト ミネソタ州小学校教諭 アーチー・スミス イーストカロライナ大学
E	◎和田 文雄 広島県立安芸府中高校 ○山本 英明 山口県徳地町立堀中学校 ●深沢 清治 広島大学学校教育学部	◎増井 宏明 広島県立広島井口高校 ○松原 隆 日野町立日野中学校 ●景山 浩之 鳥取県立境水産高校	◎安井 盛一 広島大学附属三原中学校 ○高石 博史 米子市立尚徳中学校 ●宇城 明 米子市立後藤ヶ丘中学校
	ダイアナ・ヘンショウ イーストカロライナ大学 パトリシア・キャンベル イーストカロライナ大学 デール・エリクソン ミネソタ州高等学校教諭	H. C. ハジンス イーストカロライナ大学 キティ・エンロー ミネソタ州小学校教諭	エリザベス・シマー ミネソタ州ミニ・コミュニ ケーション社 エドウィン・ベル イーストカロライナ大学
F		◎富村 誠 広島大学附属東雲小学校 ○田中 泉 広島大学附属高等学校 ●鷹家 秀史 岡山県立朝日高等学校	◎大月 隆昌 岡山県教育センター ○野村 隆之 広島市立口田中学校 ●大西幸之助 岡山県立笠岡商業高校
		パトリシア・キャンベル イーストカロライナ大学 ロジャー・ワンゲン ミネソタ州教育省	キティ・エンロー ミネソタ州小学校教諭 ヘンリー・ピール イーストカロライナ大学 ドナルド・スペンス イーストカロライナ大学

(◎チーフ, ○社会科, ●英語科)

(2) 広島プロジェクトの現地調査研究一覧

	第1年次（1993年）	第2年次（1994年）	第3年次（1995年）
経 緯	ニューヨーク→グリーンビル市（NC）→ワシントンDC→ミネアポリス市	グリーンビル市（NC）→ワシントンDC→ミネアポリス市	ミネアポリス市→ワシントンDC→グリーンビル市（NC）
視 点	日米の生活文化の比較	日米の歴史的伝統の比較	日米の問題解決の姿の比較
特 色	問題発見型調査	仮説検証型調査	問題解決型調査
A	◎アメリカ合衆国と日本の小学生の生活～地域の自然環境と生活とのかかわりを通して～	◎比べてみよう！日本・アメリカの国技～「相撲」と「野球」でお互いを理解しよう～	◎日米のごみリサイクルの比較
B	◎中学生の世界～日本とアメリカの学校生活の違いの比較～	◎家電製品からみた日米の衣食住	◎やってみよう！アメリカと日本の子どもたちの遊び～他民族の伝承遊びの内容とその背景～
C	◎子育てにみるアメリカ人の理想～しつけや日常生活からみた日米の比較～	◎日本とアメリカの中学生の放課後の過ごし方の比較	◎循環する水と人々の暮らし
D	◎地域の人々の生活	◎年中行事にみる多民族社会「アメリカ合衆国」	◎青少年の非行防止のための教育～禁煙教育を中心として～
E	◎ノースカロライナ州の農民の生活	◎アメリカ合衆国と日本の高校生の夏休みの過ごし方	◎「平和」を支える真の国際理解
F		◎日米の食文化の比較	◎住みやすいまちづくりを求めて～日米の都市環境の比較を通して～

(3) 広島プロジェクトの開発教材一覧

	第1年次（1993年）	第2年次（1994年）	第3年次（1995年）
観点	生活文化	歴史的伝統	問題解決の努力
A	◎くらべてみよう / アメリカと日本の小学生の暮らし	◎「相撲」と「野球」でお互いを理解しよう	◎リサイクルは、今どこまで
B	◎アメリカと日本の中学校生活の比較	◎まい・めぐ・けんたのドキドキホームステイ～家電製品からみた日米の衣食住～	◎やってみよう！アメリカと日本の子どもたちの遊び
C	◎子育てにみるアメリカ人の理想～しつけや日常生活からみた日米の比較～	◎日本とアメリカの中学生の放課後の過ごし方の比較～日本とアメリカの生活の背景にあるものは？～	◎みずきとウォルターの水の旅
D	◎グリーンビル市におけるボランティア活動	◎年中行事にみる多民族社会「アメリカ合衆国」	◎健全な生活環境をめざして～アメリカの喫煙率低下にみる青少年問題解決の方向性～
E	◎ノースカロライナの農業～企業的農業と家族経営農業～ ◎アメリカの大規模経営農業の現状～日本の農業との比較を通して～	◎クイズで知ろう！アメリカの高校生の夏休み	◎平和について考えよう！
F	◎アメリカ人の食生活と新しい農業	◎日米の食文化	◎住みやすいまちづくりを求めて～日米の都市環境の比較を通して～

2 異文化理解教育のカリキュラム開発の視点と方法

「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」を研究主題として行ってきた広島プロジェクトの3年間の研究成果に基づいて、異文化理解教育の目標・内容・方法と、カリキュラム開発の視点と方法について明らかにしていきたい。

(1) 異文化理解教育の目標・内容・方法

① 異文化理解教育の目標－認識と資質－

生涯学習時代の学校教育においては、国際化社会の進展に主体的に対処していくために必要な基本的な資質の育成が大きな課題となっている。すなわち、国際理解教育が必要となっている。国際理解教育には、平和教育、人権教育、開発教育、多文化教育、グローバル教育、環境教育、国際教育、コミュニケーション教育などのすべてが含まれるが、その中心となるものは異文化理解教育であろう。

広島プロジェクトの研究主題である「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」も、異文化理解教育に関する研究である。異文化理解教育の目標を設定するとすれば、認識の形成に関する目標と資質の育成に関する目標としては、次のものを設定することができる。

認識形成	<ul style="list-style-type: none"> ① 他国・他民族の社会と文化の特質やその背景についての認識とそのために必要な能力 ② 自国の社会と文化の特質やその背景についての認識とそのために必要な能力 ③ 環境問題や核戦争の脅威といった、地球上の人類が直面している重要課題の解決についての認識とそのために必要な能力
資質育成	<ul style="list-style-type: none"> ① 自国や他国・他民族の社会と文化に対する関心・意欲 ② 自国や他国・他民族の社会と文化を相互に理解し尊重しようとする態度 ③ 国際化に伴って生まれている様々な社会的課題を解決するための実践的な判断能力（意思決定力）

② 異文化理解教育の内容－2つのアプローチ－

異文化理解教育の目標を達成するためには、次の2つのアプローチが必要であろう。

◎「文化理解アプローチ」

◎「問題解決アプローチ」

「文化理解アプローチ」は、異文化理解・他文化理解・文化間理解といった文化理解に関する内容の学習である。具体的には、わが国と他国・他民族の人々の暮らしや生活文化を比較してそれぞれの文化の相違点（個性・特色）や共通点（文化の一般性）を発見する学習、なぜそのような相違点が生まれるのかを人々の暮らしや文化の背景にある地理的・歴史的・社会的諸条件や価値観・生き方から探求していく学習、わが国と他国・他民族の人々の暮らしや生活文化の共通点から文化の一般性を探求していく学習、それぞれの文化のよさは何か、相互に理解し合うためにはどうしたらよいかを判断する学習などである。

「問題解決アプローチ」は、人類が地球的レベルでの解決を迫られている課題の解決に関する学習である。具体的には、環境問題、多文化・多民族問題、南北問題、人口問題、食糧問題、資源・エネルギー問題などを取り上げ、わが国と他国において、「どのような問題があるのか」「なぜそのような問題が生じたのか」「どのような解決の取り組みがなされているのか」の認識に基づいて、「問題を解決するためにはどうしたらよいか、もっとよい方法はないか」の判断を行うような学習である。

③ 異文化理解教育の方法－「研究」－

上述したような2つの内容を学習するための異文化理解教育の方法としては、児童・生徒による「研究」という学習方法を採用することが有効であろう。なぜなら、学習主体である児童・生徒は、具体的な活動や体験を通して、学習対象である教材に働きかけることによって、異文化理解に必要な知的な問題（「なぜ、どうして」）や、実践的な問題（「どうしたらよいか、もっとよい方法はないか」）を発見するからである。問題を発見すると、問題を解決するために必要な思考・判断を行う。このような問題の発見と思考・判断というプロセスを繰り返す中で、児童・生徒は自ら異文化を学んでいく。

このような異文化理解のための学習のプロセスは、児童・生徒が異文化を「研究」するプロセスでもあると考えることができる。

(2) 異文化理解教育のカリキュラム開発の視点

前述した異文化理解教育の目標・内容・方法に基づけば、どのような視点でカリキュラム開発を行うことが必要であろうか。

① 異文化理解の内容

カリキュラム開発のための第1の視点は、異文化理解の内容、すなわち「異文化を理解するとは何を理解することなのか」を明確にしておくことである。

広島プロジェクトでは、「異文化を理解するとは、人間を理解することである」という基本的な考え方に基づいて、異文化理解の基本的な内容として、次の5点を設定した。

- (a) 人間（個人・集団・組織体）の問題解決の姿を理解すること
- (b) 人間の問題解決によって生み出された社会や文化の個性・特色を理解すること
- (c) 個性・特色の背後にある社会や文化のアイデンティティを理解すること
- (d) 社会や文化のアイデンティティの背後にある人間関係の基本となっているもの（人間と人間との結びつきを成り立たせているもの）は何かを理解すること
- (e) そのことを通して、日本の社会や文化のアイデンティティと日本人の人間関係の基本となっているものを再発見すること

② 異文化理解の方法－3つの「問い」と「活動」－

カリキュラム開発のための第2の視点は、異文化理解の方法、すなわち「異文化を理解するとはどのように理解することなのか」を明確にしておくことである。換言すれば、異文化を理解するための基本的な「問い」と「活動」の設定である。

広島プロジェクトでは、異文化理解学習の2つのアプローチである「文化理解アプローチ」と「問題解決アプローチ」の両方の学習のための教材研究・教材開発において、次の

3つの「問い」と「活動」を基本的なものとして設定した。

問 い	活動	活 動 の 形 式
どのように、どのような	記述	事象に対して「どのように、どのような」と問い、資料から事象の過程や特色などを記述する知識を抽出し発表
なぜ、どうして	説明	事象に対して「なぜ、どうして」と問い、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係の推論によって説明
どうしたらよいか、なにをなすべきか	判断	問題解決のために、「何をなすべきか、どの解決策がより望ましいか」と問い、目的を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定する活動（意思決定）

広島プロジェクトの第1・2年次の研究では、日米の生活文化や歴史的伝統の比較を通して文化理解をはかるような、「文化理解アプローチ」による教材研究・教材開発を行ったが、そこでは次のような「問い」と「活動」を重視した。

- (a) 生活文化や歴史的伝統の相違点と共通点の記述（「どのような違いがあるのか、どのような点が共通しているのか」）
- (b) 相違点と共通点が生まれる背景・理由・条件・原因の説明（「なぜそのような相違点が生まれるのか、なぜそのような共通点があるのか」）
- (c) 相互理解のための判断（「それぞれの生活文化や歴史的伝統のよさは何か、相互に理解し合うためにはどうしたらよいか」）

第3年次の研究では、日米の社会的な問題を解決の姿の比較を通して問題の解決策を考えるような、「問題解決アプローチ」による教材研究・教材開発を行ったが、そこでは次のような問いと活動を重視した。

- (a) 問題や問題解決の姿の相違点と共通点の発見（「どのような違いがあるのか、どのような点が共通しているのか」）
- (b) 相違点と共通点が生まれる背景・理由・条件・原因の探求（「なぜそのような相違点があるのか、なぜそのような共通点があるのか」）
- (c) 問題解決のための判断（「問題を解決するためにはどうしたらよいか、もっとよい方法はないか」）

③ 教材研究・教材開発の観点

カリキュラム開発のための第3の視点は、異文化を理解するための教材研究・教材開発の観点の設定である。

広島プロジェクトでは、「学校、家庭、コミュニティ、職場、州・国家」という人間の社会生活の5つの場と、「文化理解」（生活文化と歴史的伝統）と「問題解決」という異文化理解の2つの側面を、教材研究・教材開発の観点として設定した。

広島プロジェクトが開発した教材を、このようなカリキュラム開発のための2つの観点で位置づけると、次のようになる。

【カリキュラム開発の観点と開発教材の位置づけ】

		学 校	家 庭	コミュニティ	職 場	州・国家	
文 化 理	生	◎くらべてみよう！アメリカと日本の小学生の暮らし			◎ノースカロライナの農業～ 企業的農業と家族経営農業～		
	活	◎アメリカと日本の中学校生活の比較	◎まい・めぐ・けんたのドキドキホームステイ			◎アメリカの大規模経営農業の現状～日本の農業との比較を通して～	
	文	◎日本とアメリカの中学生の放課後の過ごし方の比較				◎日米の食文化	
	化	◎クイズで知ろう！アメリカの高校生の夏休み					
解	歴史的 伝統		◎子育てにみるアメリカ人の理想	◎グリーンヴィル市におけるボランティア活動		◎「相撲」と「野球」で お互いを理解しよう	
			◎年中行事にみる多民族社会「アメリカ合衆国」				
		◎やってみよう！アメリカと日本の子どもたちの遊び					
問 題 解 決			◎リサイクルは、今どこまで		◎アメリカ人の食生活と新しい農業	◎平和について考えよう！	
			◎みずきとウォルターの水の旅				
	◎健全な生活環境をめざして						
			◎住みやすいまちづくりを求めて				

(3) 異文化理解教育のカリキュラム開発の方法

① 教材構成

異文化理解教育の目標・内容・方法とカリキュラム開発の視点に基づけば、教材をどのように開発することが必要となるであろうか。

教材開発の第1の課題は、どのような学習内容（達成目標）をどのような教材を通して習得させるのかという、教材構成の問題である。

異文化理解のための教材構成においては、児童・生徒が習得する学習内容（達成目標）としてどのような構造を考えればよいのであろうか。指導要録の「観点別学習状況」の4観点である「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能、表現」「知識・理解」と、「記述」「説明」「判断」という異文化理解のための3つの「活動」に着目して、異文化理解教育の教材の学習内容（達成目標）の構造モデルを設定すれば、次のようなモデルを考えることができる。

〔学習内容（達成目標）の構造モデル〕

内容 目標		事象 (資料)	記述的知識 (知識)	説明的知識 (理解)	判断的知識 (関心・意欲・態度)
		方法 目標	データ (情報)	異文化の特色や問題解決の取り組み	異文化の特色や問題を規定する要因
学習 への 関心 ・ 意欲 ・ 態度	技能 表現力	<hr/> ⇒ (「文化や問題解決の仕方にはどのような相違点や共通点があるのか」…「記述」)			
	思考力	<hr/> ⇒ (「なぜそのような相違点や共通点が生まれるのか」…「説明」)			
	判断力	<hr/> ⇒ (「文化を相互に理解し合うためにはどうしたらよいか」「問題を解決するにはどうしたらよいか」…「判断」)			

このような学習内容を習得するためには、わが国と他国・他民族における学校、家庭、コミュニティ、職場、州・国家という社会生活の中での生活文化、大切にしている歴史的伝統、人々の問題解決の努力などについて、相互に理解し合うことができるような具体的な事例を教材として開発することが必要である。また、その教材は、児童・生徒から「なぜか、どうしてか」「どうしたらよいか、もっとよい方法はないか」といった「問い」と、それを解決するための「活動」が生まれるようなものであることが必要である。換言すれば、創造的な「出会いと発見」のある教材の開発が必要となる。

創造的な「出会いと発見」のある教材の条件と、広島プロジェクトが開発した教材を示せば、次の通りである。

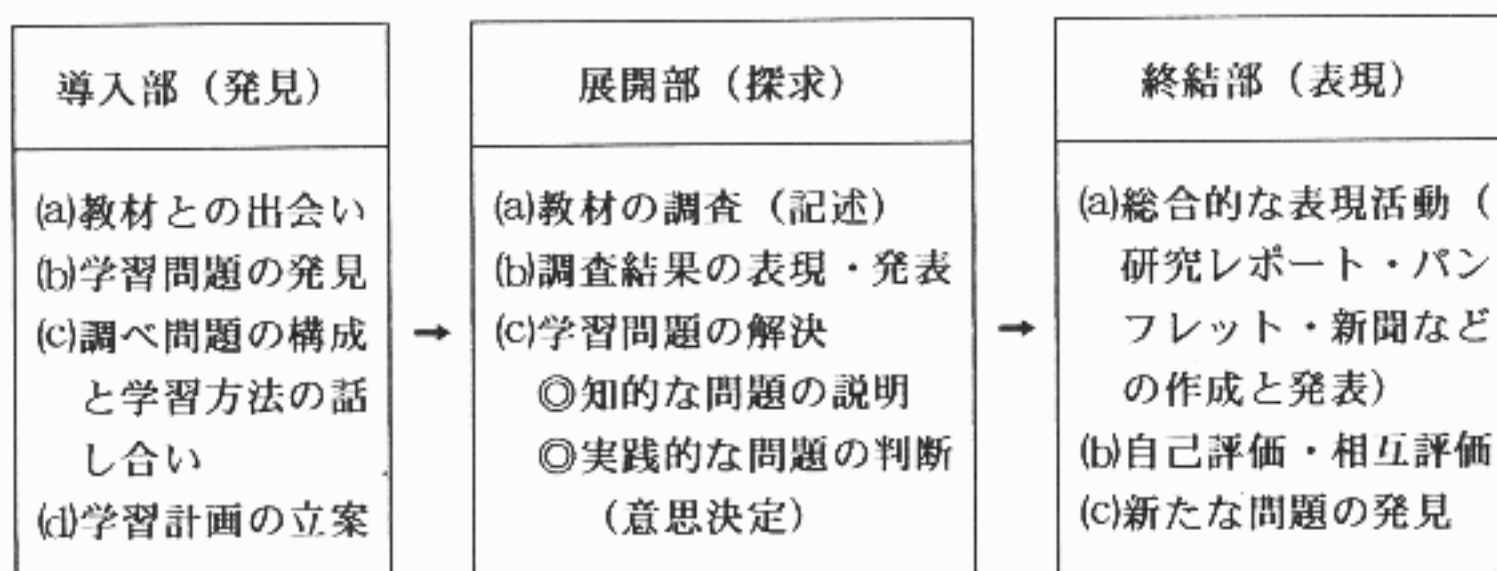
教材の条件	開発した教材
(a) 児童・生徒の生活経験と深いつながりがあり興味・関心を喚起する教材	「小学校の給食や掃除の違い」「中学生の放課後の過ごし方の違い」「高校生の夏休みの違い」「子どもたちの遊びの違い」
(b) 論争的な問題として教材	「リサイクル」「禁煙教育」「平和意識」「住みやすいまちづくり」
(c) 既存の知識・経験では説明できない知的好奇心を喚起する教材	「食生活と新しい農業」「国技として相撲と野球」「ホームステイでのドキドキ体験」
(d) 比較が可能な教材	「中学校の校則の比較」「子育ての比較」「祭りや年中行事の比較」「日米の農業の比較」
(e) 体験的・作業的な活動が可能な教材	「食文化」「ボランティア活動」「地球にやさしい水の使い方」

② 学習過程の組織

教材開発の第2の課題は、学習内容をどのような過程を通して習得させるのかという、学習過程の組織の問題である。

児童・生徒が異文化理解のために教材を「研究」する学習過程としては、次のような組織を考えることができよう。

【児童・生徒による「研究」としての学習過程】



導入部では、児童・生徒が学習問題を自分自身の問題として発見していくことができるように、教材と出会う必要がある。また、学習問題を解決するための調べ問題

の構成と学習方法の話し合いを行い、学習計画を立案する。

展開部では、調べ問題について調査し、その結果をまとめ発表する。そして、調べた内容に基づいて、学習問題である知的な問題「なぜ、どうして」と、実践的な問題「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」を解決していく。

終結部では、研究レポート、パンフレット、新聞などの作成と発表といった総合的な表現活動によって学習の成果をまとめたり、それを振り返る自己評価・相互評価の活動を行う。また、その過程で、新たな問題の発見を行う。

(文責、小原友行)

編 集 後 記

広島大学国際理解教育研究会は、1993年1月より3ヵ年計画で「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」を行ってきましたが、ここに1995年度（第3年次）の研究成果の報告書を刊行いたしました。なお、報告書は、日本語と英語の2ヶ国語で刊行しています。

本研究報告書では、1995年度の研究の概要、1995年度の研究の内容、1995年度の調査研究、1995年度の教材開発、1995年度の研究の評価、1995年度の研究の総括と今後の課題について報告するとともに、3ヵ年の研究のまとめとして、異文化理解教育のカリキュラム開発の視点と方法についても報告しています。もちろん、本研究報告書の内容の中心をなすものは、中国地方5県の先生方によって、アメリカ合衆国のミネアポリス市およびグリーンビル市での現地の先生方との共同による現地調査の成果に基づいて開発された、アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するための教材です。リサイクル、子どもたちの遊び、水と人々の生活、禁煙教育、平和意識、都市環境といった事例を取り上げた教材は、今日的な環境問題、多民族問題、青少年問題、平和問題といった社会問題の解決の工夫・努力に焦点をあてた具体的なものばかりです。学校や公民館等の多くの関係機関において、広く活用していただければ幸いです。

本研究報告書を通じて、生涯学習時代の今日、学校・地域における国際理解学習、なかでも日本とアメリカ合衆国の社会と文化の相互理解学習が、多くの先生方によって一層推進されますことを念願しております。

（小原 友行）

本報告書は、米日財団（United States - Japan Foundation, USJF）の研究助成を受けて研究した成果を刊行したものである。

アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究 第3集

印刷 1996年1月31日 発行 1996年1月31日

発行者 広島大学国際理解教育研究会 代表 小 篠 敏 明
〒739 東広島市鏡山一丁目1-1
広島大学学校教育学部
Tel. 0824-22-7111 (代 表)
印 刷 ㈱タカトープ rintメディア